今回　我が東京市電自治會が當局に提出せる嘆願書に就き、巷間傳ふる處に依ると、我々が多數を賴んで横暴を働き濫りに市政に干渉するものと宣傳し以て光輝ある、我が自治會の面目を中傷せんとしてゐると聞く。

我等は茲に我等が東京市に對する至誠の赤心を披瀝して二百萬市民の諒承を求めん。

我等の嘆願書を提出せる根本的理由は、徒らに我々從業員の待遇問題のみを主眼とするものに非ずして、要は我が東京市の電車事業が如何にするならば二百萬市民に滿足を與へ得るかに就いて我々が日常從事せる仕事の立場から數ケ條に亘る献策を爲したるものである。

果せる哉大道電氣局長は二萬圓の交際費を半減し一萬五千圓の年俸二割減を申出でた。

即ちこれは我々の要望に基いて漸く實行したるものにして、之を以て直に局長の誠意を肝度することは餘りにも早計である。

交際費半減は幾多の方法に依つて追加支出の可能性あるものにして又俸給二割減の如きも同樣如何なる方面からも回收の手段を講じ得るものである。

我々に對する最後の彈壓を加へんとする一つの準備行爲である、即ち無暴なる一大馘首を斷行するに對する社會的批難を免れんとする功妙なる胡魔化しである。

斯くの如き奸策を弄して尙二百萬市民に滿員電車を强ひ一萬五千從業員の減收を續行せんとしてゐるのである。

我等の收入遞下は尙暫くは大東京市發達の爲めには忍び得るとしても二百萬市民の日常の福利が滿員電車に依つて蹂躙されつゝあることは到底忍び得ざる處のものである。

我等は斷呼としてこれが改善を期さねばならぬ。

庶幾ば、親愛なる東京市民諸君

我等の至誠を諒して當局の奸策を白日の下に曝露し、東京市電氣事業百年の大計を確立せられんことを望む。

大正十五年十二月六日

東京市電從業員自治會